

InterBEE 2016への期待 ～音響関連～

沢口 真生

変革を振り返りながら～

2016年のNAB-SHOWやIBCで見られた変化の兆しは、今年のInterBEEにも影響を及ぼしてくることは間違いない。こうした展示会では世界的に「FUTURE ○○」といったテーマ設定がよく見られるが筆者は、この他人任せのテーマでなく明日からでもヒントになるような現実性を得るための機会となるInterBEEに期待する一人である。

日本のTV放送業界は、50年以上にわたって電波を媒体としたビジネスモデルを前提にマスメディアという立ち位置で君臨してきた。すなわち決められた放送時間帯に無料で番組をTV受信機によって視聴するという原理原則である。デジタル時代の台頭によって原理原則の再検討を強いられた最初の業界は「音楽産業」と言える。すなわちパッケージという物理メディアを前提としたビジネスモデルは、近年の急速なデジタル技術とコンピュータのパーソナル化に加えインターネットという国の垣根を超えた視聴媒体が登場し、より高品質な音声や4K映像までもがサクサクと制作・流通できるインフラが実現したからである。

このことは業態に変化をもたらした。すなわち音楽ソフトを制作してきた入り口側とCDショップのような流通媒体そして視聴者側対応の業態である。入り口側で起きた現象を象徴しているのが世界中の名門録音スタジオの倒産、閉鎖である。世界の名門大手レーベルは合従連合し、これまでのレーベルブランド力と膨大な音楽アーカイブを武器に生き残り戦略を検討している。直近のニュースではU.S.Aの老舗レコーディングスタジオ「FANTAGY STUDIO」が映像ポストプロダクションへと転身したのが好例といえよう。その代わりに急激な成長を見せたのは、パーソナル音楽制作インフラ

とDAW+プラグイン音楽ツールそしてネットでのダウンロードあるいはストリーミングという流通ビジネスである。視聴者側のインフラは、CD再生を中心とした再生環境からネットワーク・メディア再生機へとシフトさらにスマートフォンや携帯デジタルプレーヤ、あるいはPCが「ユニバーサル受信機」となりつつある。

これを放送ビジネスに当てはめていくと参考になる示唆が多く見て取れよう。

放送コンテンツを制作し、電波で放送しそのための編成を最優先にスポンサー広告収益を土台にしたビジネスモデルは、OTTと呼ばれるコンテンツの制作や供給ビジネスの台頭により、HOME STUDIOやクリエータ・編集・グレーディングのパーソナル化をもたらしつつある。逆に大規模制作では「クラウド」のワールドワイドな活用と「信頼性の確保されたインターネット」制作環境の登場である。これはこれまでの「ファイルベース・ワークフロー」を超えたスキルと見識が必要となることを意味している。

エンド側では、いかに多くの視聴者に訴求できたかの目安としてきた「視聴率調査」なるビジネスモデルもメタデータ・タグの活用といった変革を迎えようとしている。

視聴者側から見ればTV受信機と呼ばれてきた製品は、多様なメディア対応端末機へと拡張され電波受信機だけでなくネット経由の視聴機器となりつつある。ステレオセットというインフラが変化してきたのと同様の現象である。

では、どうすればいいのか？

U.S.Aの次期放送規格ATSC-3の規格内容を精査すれば、FCCも含め大手放送ネットワークが4K時代に何を生き残り戦略としているかが垣間みれる。2016年リオ・オリンピックで実験が行われたAVoIPやEBU・SMPTEなどが実現に動き始めた

LIVE放送とIP-ベース制作環境への対応は2K放送インフラが一段落し、一息ついた国内放送業界の視点にも参考になる動向である。

筆者の専門分野であるオーディオ業界は、こうした大きなビジネスモデルの変革に対応するようなビッグシフトは見られないが、AoIP対応制作機器や次世代立体音響VRや没入感サラウンド・映画音響のオブジェクトベース制作に対応した制作機器群、そしてポストCDに向けた「ハイレゾ音響制作」などに注目したい。

3年前からInterBEEも機器展示中心から様々なシンポジウムやワークショップ・イベントや講演・交流会などが充実してきたことは大変歓迎される傾向である。

筆者なども1989年から音響シンポジウムの開催にコーディネータとして参加する機会を得てきたが今年は、そうした動きが音響や映像だけでなく一層鮮明になる年で、テーマも

- 特別講演基調講演
- 映像・音響シンポジウム
- 映像・音響チュートリアル
- InterBEE Connected
- InterBEE Experience
- InterBEE Creative
- InterBEE Ignition

と来場・参加者にもわかりやすいゾーンに確立されている。

こうした場によって従来の機器展示とそれを扱うエンジニア中心の世界に加え経営やビジネス・権利処理やマーケティングそしてクリエータといった職種エリアの拡大が行われることを大いに期待したい。

Mick Sawaguchi
沢口音楽工房 UNAMAS-Label 代表